ほんりゅう 尾北

No.246
2019・10
■発　行■
尾北教職員労働組合
■責任者■
川崎　徹（犬東小）

# 英語調査 問題あり！

## やはり全国学力テストは中止しかない

さる7月31日、文科省は、今年度の全国学力テストの結果を公表しました。中学校では混乱と多忙化を招いた英語調査（「聞く・読む・書く・話す」の４技能）がはじめて実施されましたが、その結果も公表されました。

今回は、英語調査の問題点について考えてみたいと思います。

## 「書く・話す」に選択式問題の多用で課題？

「『聞く・読む・書く・話す』の４技能のうち、『書く・話す』の平均正答率が５割未満だった」「英語『書く・話す』に課題」（朝日新聞８／１）という報道がなされました。

しかし、たった５問から８問という少ない問題の平均正答率をもって、「書く・話す」に課題があるという結論を導き出してしまってよいのでしょうか。

| | 全国平均正答率 | 問題数 | 選択式 | 短答式 | 記述式 |
|---|---|---|---|---|---|
| 聞く | 68．3％ | 7問 | 6問 | 0問 | 1問 |
| 読む | 56．2％ | 6問 | 5問 | 0問 | 1問 |
| 書く | 46．4％ | 8問 | 2問 | 5問 | 1問 |
| 話す | 30．8％（参考値） | 5問 | 0問 | 3問 | 2問 |

（「話す」の「短答式」「記述式」は口述による。）

「聞く・読む」では、いずれも1問を除いてすべて選択式の問題です。この調査では、すべて4つの選択肢から1つを選ぶ方式ですので、確率的には全員が分からなくても25％が「正答」となります。

選択式の問題を多用したことにより、「聞く・読む」の学力把握は困難となりました。また、相対的に「書く・話す」より高い正答率になったのではないかと考えられます。

## 正答率１・９％の問題

「書く」では、正答率がわずか1・9％の問題（裏面に問題掲載）がありました。

極めて難しい問題によって、生徒の英語に対する自信を低下させたり、英語嫌いを増やしたりすることになってしまっては、何のために調査しているのか分からなくなります。

できなかったのは生徒・学校のせいではありません。問題が不適切であったのです。ところが、文科省は、「書くことに大きな課題がある。」（調査結果報告書）として、生徒・学校に責任を転嫁してしまいました。そして、文科省は、授業改善をするようにと教育委員会や学校に迫ってくるのです。

## 文法が身についていない

「書く」には単文を書く問題がいくつかありました。その結果からは、「一人称複数過去時制」「三人称単数現在時制」など、中学1年で学習する基本的な文法が身についていないことが明らかになりました。ただし、ここで分かったのは一部の文法についてであり、実際はもっと広く基本的な文法や知識が習得できていない可能性があります。

「書く」に課題があると言う前に、基本的な文法が身についていないというところに課題があるのです。

## １万５千人以上採点できず

「話す」については、実施にあたってトラブルが続出しました。まず、パソコン環境が不十分などのため、４８７校が参加しませんでした。また、調査当日、機器のトラブルがあって12校が中止としました。合わせて、４９９校（5万3千人以上）が調査を受けませんでした。

調査を実施したものの、ＵＳＢデータの欠損などによって採点できなかった学校が、１６５８校（調査実施校の１８・２％）に上りました。１万５千人以上の生徒が、調査を受けたにもかかわらずその結果が記載されませんでした。

授業時間を無駄に費やし、学校現場を振り回し、子どもの心を傷つけただけの調査となってしまったのです。

## 解答の声が聞こえてしまう

「話す」調査は、コンピューター室でヘッドセットをつけて行われました。ところが、生徒間の距離が近いため、

「私のマイクに周りの声が録音されてしまわないか心配だった」

「考えた答えと違うことを周りが言っていて、不安になって変えた」

（以上、朝日新聞４／18）

「できる子が答えるのをじっと待っていて、それが聞こえたら多くの生徒が答え出した。」（他県の教員の話）

## グローバル人材の育成

これら「話す」調査についての問題点

は、昨年行われた英語の予備調査で、すでに明らかにされたことばかりです。本来は、今年度の英語調査を見送るべきだったにもかかわらず、文科省はなぜ無理矢理に実施したのでしょうか。

文科省は、すべての子どもに確かな学力を保障するための義務教育から、一部のエリート人材を育成する教育へと抜本的に変えようとしています。

具体的には、英語を使って海外で活躍するグローバル人材を育成するため、英語教育の早期化・強化を進めています。

そのために、どうしても「話す」を含めた英語調査を実施する必要があったのです。英語調査は、「学力調査」を名目にしているものの、英語教育の早期化・強化に向けての推進手段だと言えます。

## 全国学力テストは中止しかない

全国学力テストをめぐっては、全国的に競争が広がっています。その結果、

「４月前後になると、例えば、調査実施前に授業時間を使って集中的に過去の調査問題を練習させ、本来実施すべき学習が十分実施できない」

（文科省通知　H28・4・28より抜粋）

といった事前対策によって、学校教育がゆがめられているところがあります。

今後、今回加わった英語にまで事前対策が広がり、競争に拍車がかかる恐れがあります。競争をあおり、子どもの心を傷つけ、学校教育をゆがめる全国学力テストは、中止しかありません。

# これが、全国平均正答率1.9％の問題！

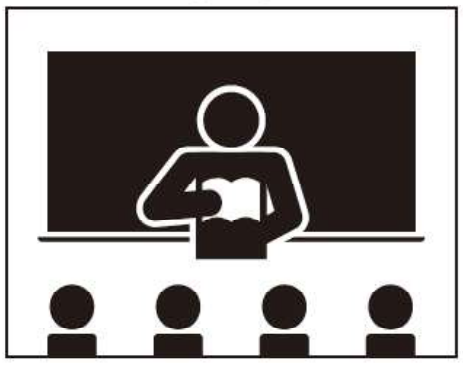
＜書くこと＞　１０番の問題

＜出題の趣旨＞ 与えられたテーマについて考えを整理し、文と文のつながりなどに注意してまとまりのある文章を書くことができるかどうかをみる。

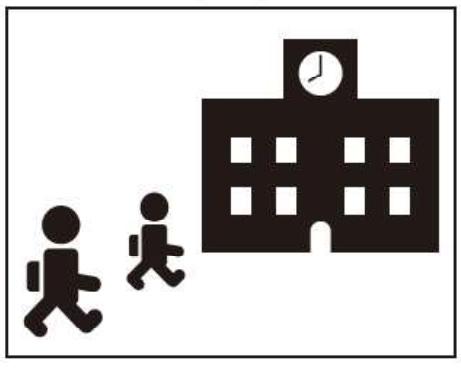
＜問題文＞

**10**　海外のある町が，外国人旅行客にも分かりやすいタウン・ガイドを作成するために，「学校」を表す２つのピクトグラム（案内用図記号）のうち，どちらがよいかウェブサイトで意見を募集しています。どちらかの案を選び，２つの案について触れながら，あなたの考えを理由とともに 25 語以上の英語で書きなさい。

【 A 】



【 B 】



※　短縮形（I'm や don't など）は１語と数え，符号（ , や ? など）は語数に含めません。

（例）　No,　　I'm　　not.　【3語】

＜正答例＞

I think A is better. It shows a teacher and students in a classroom, so it looks like a school.

I don't think B is good because it looks like a library.

＜正答の条件＞

①　どちらの案がよいか、１つ選んで意見を書いている。

②　選んだ理由について、２つの案に触れながら書いている。

③　25 語以上の英語で書いている。

＜結果＞

(1) 条件①②③を満たし、正確な英語で解答しているもの… **0．1％**

(2) 条件①②③を満たし、おおむね正確な英語で解答しているもの… **0．5％**

(3) 条件①②③を満たしているが、２つの案の触れ方について具体性に欠けるもの… **1．3％**

正答率が極端に低いのは、なぜか？…考えられること

①　設問で「どちらかの案を選び」とあるが、どちらも学校を示すのに適していて甲乙つけがたい、あるいは、両方ともふさわしくないと考えると、選ぶ段階で迷ってしまうのではないか。

②　「２つの案について触れながら、あなたの考えを理由とともに・・・書きなさい。」の質問の仕方について、「２つの案に触れる」というのは、どう触れればいいのかまず迷う。また、普通は、１つの案を選んで理由を書けば、もう一方について書く必要はないが、それをあえて書こうとすると、無理に理由を考え出さなければならなくなる。

③　２５語以上の語数制限があるため、解答が24語以下の場合、内容が正しくても誤答とされてしまう。